



人はなぜ、服を着るのか？

談：中野香織

ヌードのいわば対極にあるともいえる、服を着るという行為。
なぜ人は服を着るのか？ 服とヌードの関係を考える。

人は服なしには生きることができません。なぜ服を着るようになったかといえば、初めは身体を守るためだったと思います。そして、社会が成熟していくにつれて、服を着ることで自分の地位や立場、さらにはアイデンティティといったものを表現するようになっていきました。しかし、私たちは社会的な存在であるがゆえに、結局のところ自分のことは自分ではよくわかりません。社会における自分の存在は他人の目を通して確認しなくてはならず、そのための重要な役割を服が担っているのです。

服はまた、出会いの場においても重要な意味をもちます。出会いのきっかけを得るために、あるいは自分はこんな人間であるという情報を伝えるために、古くから人は装いを凝らしてきました。例えば、中世から19世紀の終わり頃まで、西洋の女性はコルセットでボディを締め上げ、複雑な構造の下着を装着して下半身を覆い隠し、その上に幾重にも布を重ねながら胸元は大胆に露出するというドレスで装ってきました。隠したいのが見せたいのかよくわからない矛盾だらけのこのドレスは、拒みつつ誘い、欲望を導きつつ導くという強力な誘惑装置でもあり、迷路のような構造の下にあるものにたどり着くことが男性にとって、時に女性にとっても大きな喜びの一つになっていました。

隠せば隠すほど人は見たいと思うものです。服によって隠されていればそれを脱がせてみたいと思うし、その服の下はどうなっているのか知りたいと思う。つまり、服を着ることで逆に、ヌードへの憧れや関心を強くしているのです。先ほど服はアイデンティティを表すと言いましたが、相手に強い関心をもつことはある意味でその人を剥き出しにして、すべてを丸裸にしたいということでもあります。そう考えると、ヌードへの関心をかき立てるために、人は服を着て、着飾っているといってもいいのかもしれない。

中野香織

服飾史家、エッセイスト

東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を歴任。男女ファッション史から最新モード事情まで、服飾文化が専門。著書に『紳士の名品50』『モードとエロスと資本』『ダンディズムの系譜』『愛されるモード』など。www.kaori-nakano.com



世界屈指の西洋近現代美術コレクションを誇る英国テートの所蔵作品より、19世紀後半のヴィクトリア朝から現代までの200年にわたる裸体表現の歴史を明らかにする展覧会が3月24日から神奈川・横浜美術館で開催される。日本初公開となるオーギュスト・ロダンの大理石彫刻《接吻》をはじめ、絵画や彫刻、版画、写真など、ヌードを主題にした約130点もの作品が大集結。なんとも挑戦的で刺激的なこの展覧会、どうぞお見逃しなく。

『ヌード NUDE
—英国テート・コレクションより』

3月24日(土)～6月24日(日) 会場：横浜美術館
時間：10時～18時(5月11日、6月8日は20時30分まで。入館は閉館の30分前まで) 休館日：木曜(5月3日は開館)、5月7日 料金：一般¥1,600
<https://artexhibition.jp/nude2018/>

ヌード展がやってくる！

英国テートからヌードの傑作が集結。
横浜美術館で開催される『ヌード展』を見逃すな！

